会　員　通　信・News and comments

片山正夫博士を偲ぶ
Professor Masao Katayama, 1912–1989

片山さんは，20 年余の長い期間，日本魚類学会評議員として活躍され，多くの貴重な研究業績を残された．

日頃は健康で，温和なお人柄であったので，定めしご長命のことと思っていたところ，この長寿時代にもかかわらず，満 77 才を迎えて間もなく亡くなられた．誠に残念である．

片山さんは山口県美川町の旧家出身で，広島高等師範学校付属中学校を経て同高師の理科第 3 部を卒業された．その後直ちに，農林省水産講習所（現東京水産大学）の専攻科に入学して以来，魚類の研究に専念された，言わば変わり種である．

片山さんと私は生年月日が僅か 10 日しか違わないうえ，勤め場所が長年近く，同門同学であったことから，親交の仲だったが，何ごとにつけ，私よりも先輩であった．

昭和 9 年（1934）に私が水講を卒業と入れ代わりに専攻科に入られた片山さんは，私の幼稚な目には少なからず奇異に映った．学問的雰囲気に乏しいように思えた当時の水講に何故遊学されたのかが，私たちにはまだ分からなかった．

恐らく，当時の中等学校教師として安易に過ごすことに対して，何かもの足らなさを感じての決断ではなかったかと思う．折りしも，松井佳一博士の素晴らしい金魚の遺伝研究が発表され，それに触発されたのかも知れない．

片山さんは，小学校時代を錦川の中流域で過ごされ，淡水魚と日常触れ合って成長したので，魚類とは自ずと親しみがあったとのことだ．

昭和の初め頃，水講の寺尾新教授は国内で著名な動物学者として知られていたので，畑違いを承知の上で，遺伝学の勉強をするべく，寺尾先生の教室に入ったとのことである．

たまたま，同じ部屋で机を並べ，亡き松原喜代松博士（当時助手）が超人的な研究活動をする様子をすぐ側で見ていた片山さんは，生涯消えない刺激を受けたに違いない．

片山さんは，昭和 11 年，富山県立女子師範学校を振り出しに，ずっと教職で通し，その間一貫して松原先生の指導を受けながら，魚類の研究を続け，論文は 30 余篇，発表された新種は 32 魚種に及んだ．そのほかに，著書，図説などの実績もあるが，すべての記載内容が正鵠を得ている点で著しい．

太平洋戦争の頃，片山さんが兵庫県立豊岡中学校に勤めていたとき，資源科学研究所からの依頼で魚類標本の蒐集をするため，香住町の漁港へしばしば行った．その頃，松原先生が同町を訪れると，片山さんの懇意な網元の主人が「おらが息子の先生の先生がみえた」と言って，早速，お酒と大鯛を持参して歓待した．当時，そんなことは滅多にないことだったので，松原先生はすっかり感激したと言っていた．

使い古された表現であるが，穏健篤実な片山さんは教育者として適格であったほかに，常に研学の情熱を絶やさなかった．亡くなる僅か 4 か月前にも，新しい標本を持ち帰り，調べていたと，息子さんから聞いた．

先鋭的思想風土で知られる山口県で，同じ学校に 20 年余の長い間勤め，しかも要職に留まることは，常人には困難な仕事である．厚い人徳が，教育業務と研究活動の土台となっていたためであろう．

戦後の混乱がやや落ちついた昭和 24 年，松原先生の勧めで，片山さんは学位論文のテーマとしてスズキ科魚類の分類を研究することになったが，公務多忙で，時間的余裕がなくて悩んだ．スズキ科の魚は一般に高価なため，標本購入にも費用がかかったので，思い切って，故郷の財産を全部売り払い，研究に注ぎこんだ．東シナ海・黄海や瀬戸内海の魚類資源研究のほか，各種の地方

文化団体に関与した反面には，魚類研究のためという宿願があったからであろう．

私から見た片山さんは，学徳ともに優れ，恐らく生涯，人から恨まれたり，敵をつくるなどの愚とは無縁で，生まれつき賢い人であったが，それを少しも表に現わさない，数少ない畏友の一人であった．

(石山礼蔵 Reizo Ishiyama)

カナダ，ブリティッシュコロンビア州の博物館訪問記

1989 年度のアメリカ魚類・は虫類学会 (ASIH) 年会参加のためサンフランシスコへ向う途中バンクーバーに立ち寄り，ブリティッシュコロンビア大学 (UBC) の魚類博物館 (Fish Museum, UBC) とビクトリアの州立博物館 (Royal British Columbia Museum, Victoria) を訪問する機会を得ましたので，簡単に両博物館の紹介をしておきたいと思います．というのも両博物館とも私以前に日本人の訪問者は記録にないという話を聞いたからです．

成田空港からジェット機で 9 時間，バンクーバー国際空港に到着します．ここからタクシーで 20 分で UBC の構内に着きます．広大なキャンパスには全く塀がなく，どこからがキャンパスの中なのか初めての者は戸惑ってしまいます．Fish Museum は動物部門の建物の一角にあり，広いスペースの地下室 2 部屋に系統別に手際よく配列された約 5 万点の標本が並べられています．Curator は Dr. Robert G. Carveth で本人は淡水魚を専門にしています．カナダ人特有の聞き取りやすい美しい響きの英語を話し，バンクーバー滞在中はどこへ行くのにも車で送り迎えをしてくれました．宿泊施設は17 階建て 3 棟の Gage Tower があり，1 泊約 30 $ でした．標本は Dr. Norman J. Wilimovsky が収集したベーリング海からブリティッシュコロンビア州までの海産魚と同州の淡水魚が主なものです．滞在中に Dr. Carveth から聞いた話では Dr. Wilimovsky がかなり重い病気にかかっているという事でしたので，現在でも気になっています．海と山に囲まれたバンクーバーは，その照明がことに夜の闇に浮かび上がる時に美しく，日本の北国の町を髣髴とさせました．

バンクーバーのダウンタウンにある水上飛行機の発着場から水上飛行機で 30 分，ブリティッシュコロンビア州の州都ビクトリアに着きます．その名の通り，まるでイギリスのビクトリア朝時代に迷い込んだかのような美しい町で，カナダ人が定年退職後に過ごしたい町のナンバーワンというのも頷ける所です．余談ながら 1986 年度の ASIH 年会はこの町の北にあるビクトリア大学のキャンパスで行われています．州立博物館は水上飛行機の発着場から徒歩 5 分の所に州会議事堂と並んであります．以前は British Columbia Provincial Museum と呼ばれていましたが，現在は Royal British Columbia Museum と改名されました．その歴史は古く，ちょうど 1986 年の ASIH の年会時が 100 周年にあたったという事です．早朝 8 時半，Dr. Alex E. Peden が博物館の入口で待っていてくれました．ガジ・ゲンゲ類が専門ですが，彼一人で魚類部門を担当していますので魚類ならばなんでもこなします．最近は稚魚にも関心を持っているようで，たくさんの稚魚のサンプルが未整理のまま並んでいました．町の中に Peden 銀行というのがあり，聞けば彼の祖父の銀行との事でした．RBCM の建物は展示部門と研究部門とがはっきりと分離していますので，標本類は州会議事堂側にある 13 階建ての建物の中に納められています．魚類標本の点数は約 20 万点で，その内訳は円口類 5 種，軟骨魚類約 20 種，硬骨魚類約 100 科 550 種です．魚類 25 種のタイプ標本があります．古い標本は 1800 年代に遡り，それこそ D. S. Jordan や C. H. Gilbert が使用した標本も残っています．しかし，大部分は Dr. Peden が curator になった 1971 年からのものと言う事です．採集地は海産魚がベーリング海からブリティッシュコロンビア州まで，全体の約 20 ないし 30% にあたる淡水魚が同州と合衆国ワシントン州からです．この他に僅かながら，カリフォルニア，オレゴン州からの海産魚，ワシントン，アイダホ州からの淡水魚もあります．特に充実しているのはカスペ類，カジカ類，トクビレ類，カサゴ類，クサウオ類，タウエガジ類，ゲンゲ類の標本で，これら標本は日本の北方系魚類との比較のためには見逃す事のできないものです．

Royal British Columbia Museum

ビクトリアはバンクーバーと異なり，太陽の高い日中に散策するのに向いている町です．町は様々な言葉を話す観光客に溢れ，垢抜けたみやげ物が売られています．僅か1日の滞在では残念で，また訪れてみたい町です．Dr. Peden とはその後サンフランシスコの ASIH 年会で再会し，宿泊施設でも隣の部屋になりました．最後に両博物館の住所を記します．Dr. Robert G. Carveth, Fish Museum, Dept. of Zoology, 6270 Univ. Blvd., Vancouver, B.C. V6T 2A9, Canada. Dr. Alex E. Peden, Head, Vertebrate Unit, Royal British Columbia Museum, Parliament Buildings, Victoria, B.C. V8V 1X4, Canada.

(石原　元　Hajime Ishihara)

倉敷で開催された第8回魚類自然史研究会

Eighth Symposium for Natural History of Freshwater Fishes in Kurashiki, March 19–20, 1989

第8回魚類自然史研究会が倉敷市立自然史博物館（岡山）で開催されました．その概要を報告しておきます．

3月19日：午前10時から行われる研究発表に合わせて，関西を中心に岡山，四国，関東などから研究者とアマチュア37名が倉敷に集いました．下記の研究発表が行われ，活発な論議がなされました．

1. 底生生物による水質調査法の検討
　湯浅卓雄（岡山市環境整備協会）
2. 中国雲南省における生物の分化と雲南省の自然
　友田淑郎（前国立科博）
3. 祇園用水におけるイシガイ類の繁殖生態
　近藤高貴（大教大）
4. 瀬戸内地方におけるメダカの東西分化
　酒泉　満（東京都臨床医学総合研究所）
5. 播磨地方におけるミナミヌマエビの生活史
　丹羽信彰（神戸市葺合高）
6. タイワンタナゴ *Acheilognathus* (=*Paracheilognathus*) *himantegus* の初期発育史について
　鈴木伸洋（鹿島建設）
7. タナゴ類の二枚貝選択について
　内藤順一（呉昭和高）
8. ティラピアによるアオコの除去
　矢田敏晃（大阪淡水試）
9. 山口県厚東川産ウグイ仔魚の発育と発育段階
　酒井治己（水産大）
10. ブラックバスの駆除方法
　前畑政善（琵琶湖文化館）・長田芳和（大教大）

発表終了後，懇親会があり，各テーブルには夜が更けるまで魚談義に花が咲いていました．また，河村功一・内田　隆・友田淑郎各氏によるスライド映写会も楽しいものでした．

3月20日：午前10時から岡山市内に場所を移し見学・採集会を行いました．偶然にも国指定の天然記念物アユモドキが網に入るというハプニングがあり，皆満足したようでした．

特異な淡水魚類相を擁する地域として注目される岡山での，このような研究会の開催はたいへん有意義なことであったと思います．　(江田伸司 Shinji Eda)

台北で開催された支日魚類分類学会議

Sino-Japanese Colloquium on Fish Systematics Held in Taipei, May 4–7, 1989

去る5月，台湾台北で開催された支日魚類分類学会議に参加する機会を得ましたので，この会のことを簡単に報告させていただきます．台湾と日本の魚類分類学研究者が一堂に会し，研究状況を報告し合うというこの初の試みは，台湾大学動物学系教授の沈　世傑博士が中心となり企画されたもので，日本側は阿部宗明博士が窓口となり，その実現に尽力されました．台湾の主な魚類分類学研究者のほとんどと，日本からは阿部先生を初め，北海道大学から琉球大学に至る全国から9名の本会会員が参加しました．5月4，5日は，台湾大学構内の漁業科学研究所に於いて下記の研究発表と質疑，総合討論が行われ，残り2日間は台北近辺の研究施設の視察に充てられました．2国間に共通する問題や，研究の方法論まで活発な意見交換が行われ，少なくともわれわれ日本側は台湾の現状がよく理解できたように思います．今後も両国の連絡を密に保っていきたいものです．

Papers Presented

K.-F. Huang, Hin-Kiu Mok and P.-C. Huang: Three new species of deep-sea hagfish of the genus *Paramyxine* based on morphological and mitochondrial DNA analyses.

Chyng-Shyan Tzeng, Shih-Chieh Shen and P.-C. Huang: Mitochondrial DNA identity of *Crossostoma* (Homalopteridae) from the same geographical origin.

Hin-Kiu Mok: Ontogeny of the ostariophysan kinethmoid bone.

Sy-Wen Wang and Shih-Chieh Shen: Systematic revision of codlet (Bregmacerotidae) with designations of neotypes of *Bregmaceros pescadorus* and *Bregmaceros lanceolatus*.

Tokiharu Abe: Biology of flyingfishes.

Chung-Hui Chen: Early life histories of the two surf fishes (*Iso*, Notocheiridae) from Taiwan.

Sin-Che Lee and Wei-Chung Chao: Biochemical systematics of some serranids from Taiwan (Pisces, Serranidae).

Lin-Ling Changchien, Kwang-Tsao Shao and Sin-Che Lee: The interrelationship within and between the species *Sillago sihama* and *Sillago asiatica* from Taiwan.

Tetsuo Yoshino: Validity of *Beryx mollis*.

Jeng-Ping Chen and Kwang-Tsao Shao: The phylogenetic studies of Apogoninae and Pseudaminae.

Masayoshi Hayashi: Reference to apogonid fauna of the Ryukyu Islands, East China Sea.

Kwang-Tsao Shao: The congruence studies on the generic phylogenetic relationships of Pomacentridae.

Torao Sato: Systematics of the percoid fishes of the family Lethrinidae.

Hung-Junn Chang and Hin-Kiu Mok: The sister group of the suborder Polynemoidei.

Masato Akazaki: The dispersal and the phylogeny of the Sparidae.

Che-Tsung Chen and Shoou-Jenq Joung: Additions to the shark species from Taiwan.

Toru Taniuchi: Some aspects of systematics on freshwater sharks and rays.

Shoou-Jenq Joung and Che-Tsung Chen: Fishes of the genus *Raja* (Rajiformes: Rajidae) from Taiwan.

Ryoichi Arai: Cladistic analysis in bitterlings' systematics (Acheiloganthinae, Cyprinidae).

Chen-Hsiang Liu and Shih-Chieh Shen: Clarification of genera of Mugilidae from Taiwan based on scale, gill raker and adipose eyelid.

Tetsuji Nakabo: Systematics and evolution of the family Callionymidae.

Shu-Fan Huang and Hin-Kiu Mok: Study of the variation of Mauthner cell volume in teleost.

Tetsuo Yoshino: Review of the genus *Limnichthys* (Creediidae) from Japan.

Kunio Amaoka: Relationships of the left-eyed flounders.

Tai-Sheng Chiu: Inference on the phylogenetic relationship of *Glyptocephalus* by shape—Dose shape analysis contradict osteology?

Shih-Chieh Shen and K.-Y. Wu: Phylogenetic study of balistoids on bases of scales.

K.-Y. Wu and Shih-Chieh Shen: Phylogeny study of balistoids on bases of intestinal coiling patterns.

Hsi-Jen Tao: A preliminary study on fossil fishes of Taiwan.

(佐藤寅夫 Torao Sato)

第 6 回魚類分類談話会

On the 6th Seminar for Systematic Ichthyology in Maizuru, August 25–27, 1989

京都府舞鶴市長浜の京都大学農学部附属水産実験所で第6回魚類分類談話会が開催されたので，その経過を簡単に報告する．例年の秋の開催を夏に変更したせいか，参加者は例年よりやや少なかったが，それでも最終的には約 30 名に達した．夏にしかできないことを種々計画して，過ぎ行く夏の終りを大いに楽しむことができた．

8 月 25 日(金)：夕食前に実験所周辺の藻場に4反の刺網を設置した．夕食をとりながらの談笑の後，夜8時頃から水中集魚灯を点灯して 10 時頃まで，集まってくる魚類を観察した．集まって来た魚種は体長 10 cm 前後のマアジ多数，体長約 25 cm のコノシロ約 20 尾，およびカタクチイワシシラス，ヒメジ類の 1 種，サヨリ，カマス類の 1 種，ギンポ類の 1 種などが数尾ずつであった．

8 月 26 日(土)：早朝に昨夕設置した刺網を揚げて，午前中に漁獲物をはずした．キジハタ，コノシロ，クジメ，コモンフグ，クサフグ，キュウセン，シロギス，マゴチなど予想以上に多く，合計約 70 尾が採集された．午前 11 時から下記の研究発表を行ない活発な議論があった．

研究発表 (11：00–18：00)

1. 若狭湾の貝類
荒木邦雄（若狭湾貝類研究所）
2. インド太平洋産モヨウフグ属の分類
松浦啓一（国立科学博物館）
3. 魚類標本管理について
松浦啓一（国立科学博物館）
4. ダツ目魚類の適応進化
中村 泉（京大水産実験所）
5. 若狭湾の魚類
谷 修一（今宮高校）
6. 西オーストラリア海域の魚類
河村功一（京大水産学科）
7. 京都府漁業の最近の話題
篠田正俊（京都府海洋センター）
8. Aquaculture research network in Asia
Brian F. Davy (IDRC, Canada)

9*. バイカル湖の生物
友田淑郎（前国立科学博物館）

(* バイカル湖調査の友田氏の旅程が遅れて，8 月 26 日の研究発表には間に合わなかった．しかし，東京到着

後舞鶴に直行して下さったので，8 月 27 日 10 時半から約 1 時間半余にわたって，100 余枚の出来上がったばかりのスライドで興味深いバイカル湖の生物相をかい間見ることができた.）

研究発表終了後，実験所内の海辺で BBQ パーティーを夜のふけるまで楽しんだ．和やかな雰囲気の中で，話し足りなかったことも語り合え，お互いの交友を深めることができた．舞鶴湾口付近の空を茜色に染めた夕陽の美しさが印象に残り，行く夏の淋しさを感じた.

8 月 27 日(日)：午前 9 時からあいにくの台風の影響による雨の中を，京都府漁連西舞鶴魚市場へ見学に行った．午後にも残って水産生物標本館の見学や魚類標本調査をする人も数名あったが，正午過ぎには明年の再会を約束しつつ散会した.

(中村　泉 Izumi Nakamura・
細谷和海 Kazumi Hosoya)

会　　記・Proceedings

1989 年度第 2 回役員会

1989 年 6 月 30 日(金)．於東京水産大学資料館 2 階会議室.

出席者：上野，落合，岩井，新井，沖山，佐藤，多紀，本間，黒沼，石山，中村，馬場，阿部，富永，佐野，藤田.

1．前回議事録の確認.
2．報告事項．編集：36 巻 1 号は 6 月 28 日に発行．36 巻 2 号は 9 月中に発行の予定 (15 篇掲載)．手持ち原稿 68 篇．庶務：文部省からの学会への補助金は今年度，200 万円の通知があった.
3．年会の 2 会場制について検討したが，現在の状況では 2 会場制を取らざるを得ず，ポスターセッションを増やす方向で努力することになった．また，学会発表の申し込み用紙に発表分野の項を設け，プログラムの編成に役立てることにした.
4．学会賞の検討の今後の進め方について話し合った.
5．日本学術会議の動物研連会議（新井委員），水産研連会議（岩井委員）の報告があった.

1989 年度第 3 回役員会

1989 年 9 月 7 日(木)．於東京水産大学資料館 2 階会議室.

出席者：上野，新井，沖山，佐藤，多紀，本間，黒沼，石山，中村，馬場，阿部，富永，佐野，丸山，藤田.

1．前回議事録の確認.
2．報告事項．編集：36 巻 2 号は 9 月中に発行される．手持ち原稿 74 篇．秋のシンポジウムの案内は 2 号の発行が遅れているため，別のポスターで主な関係機関へ知らせる．庶務：評議員の片山正夫氏の逝去を悼み弔電をさしあげた.
3．次期会長 (1992-1993 年度) 選挙は庶務が 12 月中に選挙用紙を作成・発送し，2 月の役員会で開票することに決まった.
4．長良川河口堰建設に反対する会から依頼のあった「長良川河口堰の東京シンポジウム」の後援はしないことに決まった.
5．学会賞について検討した.
6．その他.

日本学術会議だより No. 14 (1989 年 8 月)

このたび，「生命科学と生命工学特別委員会」は「ヒト・ゲノム・プロジェクトの推進について」と題して委員会報告を発表した．ヒト・ゲノムの全 DNA 配列決定を主たる目標とするヒト・ゲノム・プロジェクトは，極めて大きなインパクトを学術研究に与えると期待され，我が国として早急かつ重点的に推進すべきである．そのためには推進組織を設け，基本計画の立案，実施計画の策定，省庁間などの協議，国際協力，データ・ベースとレポジトリー整備などを総合的に行うべきである．一方この推進組織と並んでこれと密接に連携し，研究計画の実施に伴う社会的・法律的・倫理的諸問題を客観的・公正に判断することを目的とするチェック機構を設立し，調和のとれた施策を進める必要があるなどの内容である.

1990 年度の共同主催国際会議は，第 5 回国際生態学会議 (1990 年 8 月 23-30 日，横浜市)，第 15 回国際微生物学会議 (1990 年 9 月 13-22 日，大阪市) など 6 件を開催することが，6 月 20 日の閣議で了解された.